

ナゾの「玉前駅家」を発見！

③原遺跡(岩沼市)

奈良時代(8世紀)の大型の掘立柱建物跡が発見されました。遺跡がある玉前地区には、文献資料から古代の交通拠点「玉前駅家」が存在したとみられており、今回発見された掘立柱建物跡がその「駅家」の建物の一つと考えられます。駅家の発見例は全国的にも珍しく、今後の解明がまたれます。



南北10間(約20m)、東西3間(約7m)の大型の掘立柱建物跡です。(南から)



調査区と周辺の様子(西から)。南側には阿武隈川が流れており、内陸と太平洋沿いの幹線道路であった山道と海道の合流地点として、当時から交通の要衝でした。

住居を燃やしてお引越し？



住居跡の規模は東西5.5m、南北4.8mあります。床面の上に黒く焼けた建材が残っています。

④源光遺跡(栗原市)

奈良時代(8世紀)の竪穴住居跡1軒が発見され、床面からは焼け落ちて炭化した建材が出土しました。住居内の様子から、カマドを壊し、必要な家財道具を持ち出したうえで、火を放って住居を廃棄したと考えられます。当時の住まいの廃絶にかかわる風習を知る手がかりとなりました。



カマド内には煮炊きに使った土師器が捨てられており、カマドが廃棄された様子がうかがわれます。



住居跡は建て替えにより拡張されていました。

国府多賀城の高級食器



碗の内面。口縁部の切り込みにより器自体が花びらを表現し、花の模様が丁寧に描かれています。



横から見た碗



内面の模様



緑釉輪花碗の出土状況



調査区と多賀城政府の位置

⑤特別史跡多賀城跡(多賀城市)

城内南西部の五万崎地区を調査し、緑釉陶器の輪花碗が出土しました。大ぶりで装飾性に富んだ優品で、平安時代の初めごろ(9世紀前半)に現在の愛知県で生産されたものと考えられます。平安京で皇族や貴族が使ったものと同等の高級食器で、陸奥国府「多賀城」の格式の高さを示す貴重な発見です。

城を守れ!長大なV字形の堀



堀1の様子(南から)。規模は、長さ120m以上、上幅7～9m、深さ2～4mあります。

⑥小屋館城跡(気仙沼市)

【復興調査】三陸沿岸道建設事業

鎌倉～戦国時代(14～16世紀)に気仙沼を治めた熊谷氏が築城したと伝わる山城跡です。

平成28年度から調査を開始し、今年度は昨年度に見つかった城跡の西側を守る2条の堀跡の南端部が発見されました。

堀1は長さ120m以上、堀2は80m以上あり、自然地形を巧みに利用した大規模な防御施設であることがわかりました。



小屋館城跡の全景(2017年撮影。北東から)

仙台城内で酒造り



造酒屋敷跡は仙台藩のために酒を造っていた榊森家の屋敷地です。約270年間、酒造りを続けました。

⑦史跡仙台城跡(仙台市)

造酒屋敷は、仙台城内で酒造りをしていた場所です。屋敷跡の西部を調査し、礎石建の建物跡や石組みの溝跡などが発見されました。

屋敷跡は築城当時の正面の登城路沿いにあり、城の防衛上重要な場所にあります。また、城内に造酒屋敷を置くことは全国的にも珍しく、このような配置をとった伊達政宗の意図を想像すると、興味がつきません。



発見された礎石建の建物跡



酒造りには城内の清水を利用しており、石組みの溝で排水したとみられます。

移設に向けて—線刻壁画の復原—

【壁画の発見と取り出し】

平成27年5月、防災集団移転に伴う発掘調査により古墳時代から奈良時代の横穴墓(38号墓)の壁に人や鳥などの図柄が刻まれた貴重な壁画が発見されました。

この壁画は移設して保存することとなり、平成28年5月に13のパーツに分割して取り出され、復原のために京都の専門業者のもとへ運ばれました。

※線刻壁画の発見から取り出しまでの詳細は次のページをご参照ください。



横穴墓に刻まれた壁画。幅3.6m、高さ1.7mほどあります。



横穴墓は合計54基発見されました。

【分割した壁画の復原】

線刻壁画の移設保存は国内で初めての事です。分割した壁画を復原する作業は、①梱包材と不要な土の除去、②線刻面(表面)と壁面(裏面)の強化、③各パーツの接合と設置用骨組みの取り付け、④目地埋め・表面加工の調整・部分的な再強化、⑤色彩調整などの工程を経て平成30年9月末に完了し、山元町へ運ばれました。



13のパーツに分割・梱包され、専門業者のもとへ運ばれた壁画。



梱包材を除去し、薬剤を塗って表面が崩れないように強化します。



表面の強化が済んだ壁画の一部。



強化した後、13のパーツを組み合せていきます。



パーツを接合し、設置用の骨組みを取り付けます。



目地(つなぎ目)を埋めるなど、細かな調整を行います。

線刻壁画移設の完了と公開へ

【移設の完了】

復元された線刻壁画は、専用に展示室を改修し、受け入れ体制を整えた山元町歴史民俗資料館に平成30年10月に運ばれ、約2年4ヶ月ぶりに山元町へ帰ってきました。



壁画観覧の様子。公開から2日で約700名が来場しました。

【公開と今後】

11月3日から歴史民俗資料館で公開が始まり、翌4日にはパネルディスカッションが開催されました。

こうして、国内初の試みとなった線刻壁画の移設は無事に完了し、貴重な文化財として後世に伝えられていくこととなります。



パネルディスカッションの様子。約250名の参加がありました。



展示の様子。天井や壁の一部も復元し、床面の再現や形状の明示、照明などを工夫することで、壁画が発見された当時の横穴墓の姿を表現しています。

山元町 合戦原遺跡の線刻壁画の取り出し

壁画の発見と描かれた内容



遺体を安置した玄室奥壁の壁画。大きさは幅3.6m、高さ1.7mほどです。

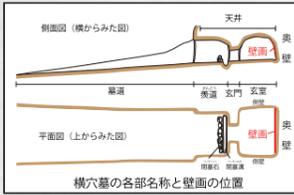
横穴墓に刻まれた来世への願い

古墳時代から奈良時代にかけて作られた横穴墓54基の中で玄室の規模が最大の38号墓の玄室の奥壁に、複数の人物や鳥とみられる図柄が刻み込まれた壁画が発見されました。壁画は当時の人々の他界観・来世観を示すとされ、この壁画の詳細な内容も解明が待たれます。

これほど多様な図柄が描かれる例は東北地方でも珍しく、貴重な発見となりました。



壁画の描き起こし図



横穴墓の各部分名称と壁画の位置

壁画移設の経緯と経過

【移設の経緯と経過】

防災集団移転予定地内の発掘調査で発見された壁画の歴史的・美術的価値の高さは、マスコミ等の報道を通じて全国に発信され、現地説明会には約450名の見学者が詰めかけました。

そこで、壁画の現地保存と被災者の迅速な住宅再建との両立が検討されました。その結果、現地保存のかわりに移設して保存することに決まりました。

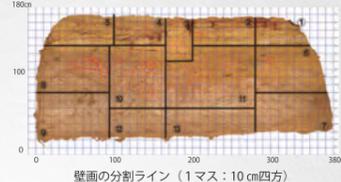


防災集団移転予定地内で発見された横穴墓群

【移設方法の決定】

壁画の下地である岩は軟弱で脆く、水分を多く含むことから、取り出す際に壁画と一緒に崩れる危険性が高いものでした。この悪条件での移設は**日本初の試み**で、新たな移設方法を速やかに確立するため、文化庁や専門家とともに数十回の実験と検証を重ねました。

その結果、壁画は下地ごと薬剤を浸透させ強化した後、13分割して各壁画を厚めに剥ぎ取り、横穴から外へ搬出することに決まりました。



【壁画分割ラインの設定理由】

- ・横穴(最大高120×幅100cm)から搬出が可能。
- ・地層の境目を避ける。(境目から壁画が裂ける危険性)
- ・分割を100cm四方より小さくすると、壁画が裂ける危険性が低いという実験結果。
- ・図柄の価値をなるべく損なわないよう線が多い場所を避ける。

移設の順序と工程

壁画の取り出しは、平成28年5月9日から30日(21日間)に実施しました。作業は①②壁画の保護と作業空間の確保、③～⑤13分割しての壁画の取り出し、⑥⑦壁画の養生と運搬の順序で行い、無事、壁画の取り出しに成功しました。この方法は、**日本初の例**として平成28年8月30日の世界考古学会議で発表されて話題となり、参加した約1,800名を通して、**86ヶ国・地域**へと発信されました。

① 壁面の強化・養生



② 作業空間の確保(天井掘削)



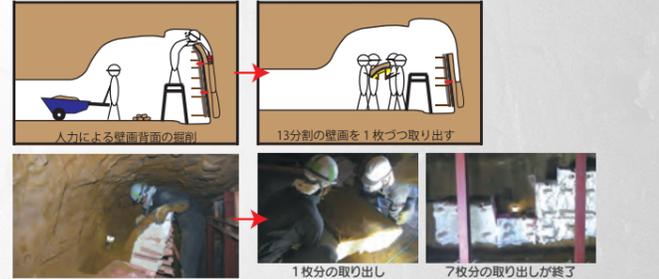
③ 13分割の線を切り、仕切りを設置



④ バックアップの設置(壁画表面の固定)



⑤ 壁画の背面を掘削後、各壁画の取り出し



⑥ 養生と箱詰め



⑦ 運搬して保管



壁画の今後

現在、分割した13枚の壁画は、京都の専門業者によりそれぞれを強化し、1枚の壁画に復元するため接合中です。町では、この壁画を歴史民俗資料館で一般公開できるよう、準備を進めています。

平成30年度 宮城の発掘調査パネル展

宮城県教育庁文化財課

宮城県には、旧石器時代から明治時代まで約6,200ヶ所の遺跡があります。これらは私たちの祖先が残した貴重な遺産であり、大切に保存し後世に伝えていくことが私たちの責務と考えております。

県教育委員会は、これらの保護と活用に全力をあげて取り組んでおりますが、やむを得ず開発によって姿を消す遺跡については、発掘調査を実施して記録に残しています。

このたび、平成30年度に行った発掘調査の中で、特に注目すべき遺跡や東日本大震災の復興事業にともなって調査した遺跡に加え、世界的に注目されている山元町合戦原遺跡の壁画移設の完了と一般公開の様子をパネルで紹介いたします。この機会に遺跡に親しみ、文化財保護へのご理解を深めていただければ幸いです。

今回の展示にあたって快く御協力いただきました各教育委員会・機関に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



| 時代 | 年代 | 日本の主な出来事 | パネル番号 |
|----------|------------------------|--|-------------|
| 旧石器 | 約750万年前 約3.5万年前 | アフリカで人類が誕生する 後期旧石器時代が始まる | |
| 縄文 | 約1万6,000年前 約5,000年前 | 土器・弓矢が出現する 三内丸山遺跡(青森県)で集落が営まれる | ① |
| 弥生 | 紀元前400年頃 | 東北地方で米作りが始まる | |
| 古墳 | 紀元後300年頃 | 豪族が盛んに古墳を造る | ② |
| 飛鳥 | 607年 645年 | 推古天皇、小野妹子を隋に遣わす(遣隋使) 大化の改新が起こる | ★ 【特集】 |
| 奈良 | 710年 724年 752年 | 平城京(奈良市)に都を移す 多賀城が築かれる 東大寺の大仏が完成する | ③ ④ ⑤ |
| 平安 | 794年 869年 | 平安京(京都市)に都を移す 貞観大地震で多賀城が大きな被害を受ける | ⑤ |
| 鎌倉 | 1192年 1274・1281年 | 源頼朝が征夷大将軍になる 文永・弘安の役(元寇)が起こる | |
| 室町 | 1338年 1467年 | 足利尊氏が室町幕府を開く 応仁の乱が起こる | ★⑥ |
| 安土 桃山 | 1590年 1600年 | 豊臣秀吉が天下を統一する 仙台城の築城始まる | |
| 江戸 | 1603年 1611年 | 徳川家康が江戸幕府を開く 慶長三陸地震津波で仙台平野が大きな被害を受ける | ⑦ |
| 明治 | 1868年 1876年 | 明治維新 明治天皇が東北を巡幸する。 | |

★印は、東日本大震災の復旧・復興調査

縄文時代 ごみ捨て場から見える縄文の営み



①横須賀貝塚(栗原市)

内沼の北側に位置する縄文時代晩期(約2,500年前)の貝塚で、集落の周囲に形成された遺物包含層(捨て場)が発見されました。

調査では縄文土器、土偶、石器、骨角器、シカ・イノシシなどの獣骨、フナなどの魚骨、タニシなどの貝類が出土しました。

これらから、周辺の山や水辺の資源を利用した縄文人の暮らしがうかがえます。

遺物を含む埋戻し層(貝殻を多く含む土)は、地表下約1.6～1.9mで確認されました。

古墳時代 大溝で守られた大集落



南西から見た入の沢遺跡。周囲を一望できる標高約50mの丘陵上に立地しています。

②史跡入の沢遺跡(栗原市)

周囲に大溝を巡らせた古墳時代前期(4世紀)の大規模な集落です。

過去の調査では、多数の竪穴住居跡が見つかり、銅鏡など特別な道具も出土しています。今回は集落南側の大溝を発見し、丘陵の地形に合わせて大溝が全周していたことが判明しました。

これにより、高い防御性を備えた集落の様子がいっそう明らかになりました。

北側では大溝の外内に材木崩跡や盛土遺構もあり、外敵の進入を防ぐ意図の強さがうかがえます。

発掘現場から文化力

埋蔵文化財は、国や地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない国民共有の財産であり、また、これらを解明するうえで発掘調査は必要不可欠なものです。このため、文化庁では「発掘現場から文化力」のロゴマークを作成し、広くロゴマークを推奨し活用することで、国民や地域住民に埋蔵文化財や発掘調査に対する正しい理解と協力を促進することを目的としています。背景のカラーは発掘調査にふさわしい茶系統を使用しています。

協力(五十音順)
岩沼市教育委員会(原遺跡)、栗原市教育委員会(横須賀貝塚・入の沢遺跡)、仙台市教育委員会(仙台城跡)、多賀城跡調査研究所(多賀城跡)、山元町教育委員会(合戦原遺跡)

ホームページアドレスは、<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/bunkazai/>